

年度	令和5年度(中期計画2年目)
本校の使命(スクール・ミッション)	他者を尊重し、さわやかに振る舞うとともに、課題解決に尽力するなど、社会人としての「生きる力」を育成する。
令和5年度 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活における目的意識と社会における規範意識を高め、多様な人々とともに、目標に向けて協力する力を育てる。 ・地域・家庭と連携して主体的な学力を身に付けさせるとともに、思考力・判断力・表現力を高める授業を展開する。 ・ICTを活用し、対話的で探究的な学習活動を充実させる。 ・指導と評価の一体化を意識した学習指導を推進する。 ・コロナ禍で制限されていた教育活動を順次再開するとともに、新たな視点で、地域の教育資源を活用した教育を推進する。

1 スクール・ポリシーの内容

教育方針 (スクール・ポリシー)	入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー)	本校では、以下のような生徒を積極的に受け入れます。 ①本校の使命や教育方針を理解する生徒 ②本校で学びたいという強い意欲を持ち、自己実現に向けて、主体的に学習に取り組む生徒 ③部活動やボランティア活動等を通して学校生活全般に意欲的に取り組む生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 (カリキュラム・ポリシー)	本校では、校訓「清新・敬愛・力行」の精神を基調として、社会人としての「生きる力」を育成することを、教育目標として、その実現のために以下の教育を行います。 ①日々の学習を通して確かな学力を身に付けさせるとともに、思考力・判断力・表現力を高める授業を展開する。 ②人権を尊重する態度やコミュニケーション力を培い、自他を敬愛する心と社会規範意識を高める。 ③心と体のバランスを整える力を養い、充実した生き生きとした学校生活を送らせる。 ④人生100年時代を見据えたキャリア教育を推進し、「何と、どのように学び、どう活躍するか」を主体性を持って考え、実践しようとする生徒を育てる。 ⑤進路実現に向け、2年次から文系、文理系、理系のコースを設定するとともに多様な学びに対応した選択教科を設ける。 ⑥進路実現に向けて、進路先の訪問や、招聘する機会等を設けて、個に応じた進路指導を徹底する。
	育成を目指す資質・能力に関する方針 (グラデュエーション・ポリシー)	本校では、卒業までに以下の資質・能力の育成を目指す。 ①自己の考えをもち、周りの人々と適切なコミュニケーションが図れ、他と協力して問題解決できる。 ②西和清陵高校生としての誇りを持ち、地域社会に貢献でき、信頼される。 ③人権意識と社会規範意識を身に付けている。

2 奈良県教育振興基本計画(「奈良の学び推進プラン」)が示す各テーマごとの学校教育

テーマ	学校の教育活動に関する目標(A)	計画期間における具体的な目標(B)	令和5年度末の目標値等(C)	令和5年度末の状況(D)	自己評価(E)	学校関係者評価(F)	改善方策(案)
1. 心と身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ (保健・生徒指導)	望ましい運動習慣の確立	スポーツテストにおけるTスコア8%アップ	スポーツテストにおけるTスコア前年度比5%アップ	Tスコアは、前年度比0.1%の増加にとどまった	年間を通じ、ホームルームや授業で運動習慣の重要性を啓発した。また、体育系学校行事をコロナ禍以前の体制で実施。令和4年度「前年度比-2.8%」という結果を踏まえると若干の上昇が認められる。	将来にわたって健康な体の育成と保持は「長寿社会」社会を生き抜くうえで重要な課題である。単なる「長寿」ではなく「健康寿命」の観点から若年層から意識することという結果を踏まえると若干の上昇が認められる。	健康増進・体力強化を目標とした運動習慣の必要性を生徒が認識できるよう教育活動を展開する。加えて、スポーツテストの意義と目的を明確にし、生徒がそれを意識して参加できるよう指導する。
	クラブ活動を通じた、達成感・成長感、自己肯定感等の向上	部活動加入率80%以上	部活動加入率50%以上、部員の活動満足度80%以上	部活動の加入率は36%・部員の活動満足度は85%である。	生徒の主体的な活動を支援するために、生徒会規約を改定した。これを受け、バドミントン同好会が新設された。	部活動はもちろんのこと、放課後の課外活動の活性化を図るべき。	目標達成はかなわなかったが、部活動活性化は確実に進んでいる。「高校生活で何を頑張ったのか」という問いに回答するためには、生徒の主体的な学びが必須と考えている。将来的なキャリアデザインもイメージさせながら、生徒の意識改革を促したい。
	健康教育の一環として、望ましい食習慣の確立	毎朝の朝食摂取率80%以上	毎朝の朝食摂取率75%以上・年3回「保健だより」に「食育コーナー」を設定する	朝食摂取率は78%。「保健だより」の「食育コーナー」設定は目標達成。	朝食摂取率は昨年度比8%のアップ。保護者の皆様の働きかけのおかげもあり「生活習慣の基礎基本の重要性」が生徒の理解につながり、摂取率の向上につながっていると思われる。	望ましい食習慣の確立は日々の積み重ねが肝心。ご家庭との協力を図りつつ、引き続き取組を期待する。	生徒には「家庭」や「保健」の授業内容の充実および「HR」における取組をとおし効果的な指導を心がけたい。また「保健だより」等を配布し、保護者への啓発を進め、学校とご家庭との連携の強化を進める。
2. 学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ (教務・進路・教科主任・文化図書・GIGA推進)	基礎・基本的な学力を身につけさせるとともに、思考力・判断力・表現力を高める授業の工夫	BYODにより、効果的にICTを活用した授業の実践	授業実践力向上に有益な研修への参加率90%以上	教員の研修参加率86%	新学習指導要領に基づく「観点別評価」に関連した「授業と評価の一体化」に積極的に取り組んでいる。今年度自学自習を進めるため、学習ソフトを導入し、職員研修も実施したが、生徒の活用度は高まらなかった。	BYODによるICT機器の活用について、課題を明らかにし、効果的な活用方法を見いだしていただきたい。	教職員は日々自己研鑽に努め、生徒の「学び」に向かう力「育」育のため、ICT機器の効果的な活用を工夫する。
	SDGsの視点を取り入れた探究活動による「主体的・対話的で深い学び」の実現	SDGsに関する課題研究の発表会の開催	プレゼンテーション及びフィードバック等、課題研究の手法の全教科への導入	アンケート結果は達成率34%という結果であり、SDGsの視点での探究活動の取組の進捗状況は思わしくないが、各授業での探究活動は浸透している。	進路保障の観点からも重要視されるべき分野として探究活動を取り入れた授業展開の推進を強化したい。課外での活動となるが、生徒有志によるSDGsをテーマにした探究活動に取り組む。地元中学校での発表につなげることができた。	探究的な手法を用いた授業実践は、実社会で必要な問題解決力の育成につながるので引き続き教育活動に積極的に取り入れていただきたい。	教職員は日々自己研鑽に努め、探究活動のきっかけとなる授業展開に努める。加えて、各教科横断的に連携し、探究活動の成果を生徒がプレゼンテーションする機会を増やしていきたい。
	学習意欲の向上と自立した主体的な学びの実現	在学中の各種検定取得者70%以上	実用英語技能検定・漢検検定及びパソコン検定等資格認定試験の受験率80%以上	受験率56%。年間を通しての合格率は結果待ちである。	今後検定取得による「増加単位取得認定」を、教育課程内に位置づけることも検討している。また、英検を第1学年・第2学年全員受験ならびに漢字検定2年生全員受験についても検討を進めていく。	各種検定合格に向けた取組は生徒の「学びに向かう力」の醸成に有効である。また「検定合格」な大きな成功体験となり、自己のキャリア実現に直結しているため、今後も積極的に取組を進めて欲しい。	今後は、英検・漢検の全員受験を検討するとともに、対策講座の充実を視野に入れていく。
3. 働く意欲と働く力をはぐくむ (進路)	教職員が目標達成に向けて、生き生きと働き、輝かな達成感や成長感を感じながら取り組める職場環境の構築	ストレスチェック結果の改善と学校衛生委員会の有機的活用	職員の労働環境満足度70%以上ならびに年休取得日数年平均8日以上	長期休業中を中心に、積極的な年休取得が進んでいる。今年度より校内組織を改編し、各分掌や係が担う業務を明確化し、業務が円滑に進むよう努めた。職員の労働環境満足度は78%である。	年休取得率は県立学校中2位である。教員間の密な連携がそれを支えている。	働き方改革は時代の流れであり、引き続き推進していただきたい。	管理職との面談機会を拡大する。対話を重ねることで、チームで働く力を育て、教職員がやりがいを持って働くことのできる職場作りを推進する。
	キャリアコンサルティングの充実	生徒理解と可能性を伸ばすキャリア教育の推進	個人面談年間5回以上実施(生徒一人当たり)	各学期末の保護者面談及び各学期当初の面談をとおし、生徒一人当たり5回(学校平均)の面談を実施した。	教職員はもとより、生徒・保護者に対しても、全ての面談は「キャリア教育」の視点で実施するという意識の醸成を継続する。	高校卒業後の進路を見据えた日々の学校生活の充実と密着する教育活動の展開を引き続き希望する。加えて生涯にわたって自分自身の「キャリア」について考える力を身に付けさせていきたい。	教職員は、生徒との全ての面談機会が生徒自身の「キャリア」形成に寄与することを念頭に置き、面談等進路実現へのスケジュール理解させ「今何をすべきなのか」を自ら考え行動する生徒の育成に努める。
	様々な場面でのコミュニケーションを通じた、ものの見方や考え方の育成	産業界・事業所と連携したインターンシップ参加率30%	キャリアガイダンス・進路講演会を各学年で実施しインターンシップ参加率25%	インターンシップ参加率33%	「生涯教育」の一環としての「インターンシップ」参加を促した。今後は本校独自の受け入れ先の開拓を進めたい。	「生涯教育」の一環としての「インターンシップ」参加を促した。今後は本校独自の受け入れ先の開拓を進めたい。	インターンシップは、大切な取組なので、各家庭への広報も十分に行なった上で、参加者を増やしてほしい。
4. 地域と協働して活躍する人を育てる (生徒指導・環境・総務・管理職)	一人一人の生徒の能力や適性に応じた進路指導の工夫・充実	ミスマッチを防いだ進路保障に努め、1年以内の離職率は5%以下、退学率は1%以下とする。	進学志望生徒のオープンキャンパス参加率100%・就職志望生徒の企業見学参加率100%・就職内定者に対する就職前研修の実施。	目標達成	大学入学決定者に対し、入学前研修、就職内定者に対する就職前研修を実施し、進路先での適応がスムーズに進むよう指導している。	よい取組であり、継続して実践していただきたい。	本校教職員による指導に加え、外部講師による指導の充実を図りつつ今後も継続する。
	コミュニティ・スクールの効果的な運営	教職員との連携と学校運営協議会の年度3回の実施	学校運営協議会委員と連携した地域連携の推進	目標達成	学校運営協議会の運営を「地域と共にある学校づくり」に近づけたい。今まで以上に意思の疎通を図った運営を行いたい。	今後も、意義あるコミュニティ・スクールの運営に努めていきたい。	学校運営協議会委員の皆様にも、具体的な学校運営に参画していただけるよう、個別の連携を積極的に深めていきたい。
	地域協働「地域と共にある学校づくり」の工夫・充実	地元事業所・役場と連携した行事の開催	ボランティア活動・通学路清掃等、地域への貢献活動の実施	目標達成に向け地域連携事業を展開した(例：三郷町役場との連携、西和警察署との連携等)	今後も三郷町教育委員会や町内各校などと連携し、協働による教育活動を実践したい。	三郷町立地の県立学校として、地域の事業所や教育機関等との連携を深めることはよいことである。	三郷町内における小・中・高連携による一貫したキャリア教育の実践を模索したい。
5. 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる (人権・生徒指導・教育相談)	災害時のボランティア活動の推進	地域と協働した定期的な防災訓練の実施	地元自治体と連携した体験的な防災教育・防災訓練の推進	亀の瀬等の現地研修ならびにDMAT・自衛隊による災害時における緊急対応や避難所におけるボランティア活動など「自助」「共助」の観点においても学習を進めた	キャリア教育係を中心に来年度の「西和清陵セミナー」年間計画を見直し、更なる充実を図っていく。	洪水・地震等の災害が頻発する中、防災意識を高める取組の推進は今後もその必要性が増すであろう。	自治体との連携に努め災害に備える。キャリア教育の一環として取り組む。
	学校いじめ防止方針に基づく取組の推進	誰も取り残さない「取組」の実践するため、生徒情報の共有化等の組織的取り組みを完成させる	個人面談・アンケートを活用し、早期発見に努める。定期的な対策会議の実施。	計画的に「アンケート」「個人面談」を実施し早期発見ならびに支援体制の確立に努めた	アンケート結果を即時分析し支援の必要な生徒への声かけをおこなった。保護者とも連携した。	県内で、いじめ関連の相談件数の増加が報道されていたが、今後も、迅速かつ適切な対応をお願いしたい。	生徒の学校生活に気を配り、少しの変化にも適切に対応できる教職員集団の醸成に努める。定期的な面談・アンケート等の実施により、状況把握を適切におこなう。今後も、生徒・保護者双方の理解を得られる対応を心がける。
	特別支援教育の推進	出身中学校等とも連携し、対象となる生徒の状況を組織的に把握し、個に応じた指導を実施する。	本校の課題に即した年2回の職員研修を実施。外部機関(教育研究所・医療機関・スクールカウンセラーなど)との連携。	特別な支援の必要な生徒理解につながる職員研修を研修は適宜実施した	必要に応じ、個別的教育支援計画を作成。保護者との連携を図り進めた。	個別の情報収集し、丁寧な対応をして頂いていると感じる。	出身中学校・医療機関等との連携を継続する。
世界人権宣言を尊重する教育の推進	外部人材を活用した効果的な学習の実践	人権HR・人権講演会の各学年4時間開催	目標達成	社会に貢献できる人材への成長に必要不可欠な学習であると考えている。今後も更なる充実を図る。	SDGsの達成を掲げる三郷町にとって、重要な課題である。	「今自分に何ができるのか」を考え、能動的に実践する力の醸成に努める。教職員は、自らの働く姿が「社会貢献」する大の姿として生徒の目に映るのだということを常に念頭に置き、人権教育の目標達成に向け教育活動を展開する。	

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

令和5年度の目標値については、その進捗状況に差が見られるものの、スクール・ミッションに根ざした教育活動の成果は確実に上がっている。なかでも、地域連携においては、三郷町立小・中学校との地域密着型の協働活動に発展が見られた。「キャリア教育」の一環として広く受け入れられている各種検定については合格率が飛躍的に上昇した。また「社会人として生きる力」を身に付けることを主たる目的とした「総合的な探究の時間(西和清陵セミナー)」を中心に教科横断的教育活動に取り組んだ。生徒の学校満足度は78%。保護者の学校満足度は85%である。今後の課題は、授業における、生徒の手による「探究活動の充実」と「プレゼンテーション能力の向上」である。以上の取組を足がかりに、生徒の「学びに向かう力」や「協働活動をとおして目標を達成する力」の醸成に努める必要がある。